

NN学会の若手の集いに参加することの意義 The benefits of participation in young fellows meetings of the JSIDRE

中桐貴生*

Takao NAKAGIRI*

1.はじめに 農業農村工学会(以下, NN学会)の全国大会講演会の期間中に学生会員を中心とした若手懇親会が開かれている. この懇親会は1994年7月に金沢で開催された全国大会の時に初めて開かれ, 以来26年間ほぼ欠かさず続けられてきた.

また, これとは別に, 学生や社会人になったばかりの若手だけで企画されたサマーセミナーも全国大会の時期・場所に合わせて開催されている. こちらは開催されなかった年もあるものの, 1996年7月に第1回目が開催されて以降, 開催数は20回以上に及んでいる.

ここでは, こうした若手の集いに参加することの意義について, 自身の経験を踏まえて述べていきたい.

2.参加するメリット 筆者は, 若手懇親会およびサマーセミナーの第1回目の企画に携わったメンバーの1人であり, NN学会において, こうした学生を中心とした若手による自主的な企画がなされるようになった発端¹⁾や歴史²⁾について過去に整理したことがあるので, 興味のある方はそちらをご覧ください. 若手懇親会やサマーセミナーは基本的には若手の間での自主的な企画であるにもかかわらず, 四半世紀にもわたって続いてきた. これは, 「開催あるいは参加する価値がある」と認識しているか, そこまでではないにしても少なくとも「関心をもっている」若手が多少なりとも存在し続けたことを意味するといえる.

こうした若手の集いに参加するメリットとしては, 参加者個々で様々であることはもちろんであろうが, ベースとして「色々な大学の学生と知り合いになって色々な話ができる」, 「同世代の人達と気楽にワイワイ騒げる」ということが挙げられるのではないだろうか. (少なくとも筆者はそうだった.)

ただ, 筆者にとっては, これらに加え, NN学会という枠の中での集いだからこそ得られる価値もあったと感じている. NN分野は, 大学の専門分野全体で見れば, マイナーであり, 学部時代には学科に高校までの1クラス分ぐらいの人数が居る大学もあるが, 研究室に所属され, 学会に参加するぐらいの学年になると, 普段接する同じ専門分野の学生数は1桁台というケースも希ではない. また, 同じ研究室の学生同士であっても, 研究テーマが異なるため, 愚痴の言い合いはできても, 研究についての建設的な議論は案外できないということも少なくない. こうした中, 各大学ではマイナーでも全国から集まれば, それなりに大人数となり, 同じ大学内よりもむしろ自分と近いテーマでの研究に取り組んでいる人に出会えるチャンスもあり, お互いに情報交換することで, 「自分ももっとちゃんと研究をせねば」という刺激を受けたり, 時には自身の研究の進捗に繋がったりすることもあった. さらに, 同じ専門分野ということもあり, 普段の研究生活や将来の進路など話題の共通性が高く, 会話の中に共感が得やすい場面も多く, こうしたことは自分のもやもやした閉塞感や不安感の解消にも繋がり, これは筆者にとってはかなり大きなメリットであった.

* 大阪府立大学大学院生命環境科学研究科 Grad. School of Life and Environmental Sciences, Osaka Pref. Univ.

キーワード: サマーセミナー, 若手懇親会, 人的ネットワーク

3.人の繋りを将来どう活かすか NN 分野は、農業生産性の向上と、中小都市を含む農村地域全体の持続的発展を目標とする学問分野であり、①対象となる地域の規模や、②必要となる学問知識および技術の多様さ、③行政機関、研究機関、民間企業それぞれからのアプローチの必要性、などを考えると、到底個人だけで対応しきれぬものはほとんどない。したがって、この分野は人と人の繋りを基礎として成り立っている分野といっても過言ではない。

ところで、NN 学会は 2019 年 5 月に創立 90 周年を迎え、これを記念して水土の知 87(12)に、「農業農村工学の最近 20 年の歩みと 100 周年への飛躍を求めて」というタイトルで特集が組まれた。そこには官民学の各関係者が執筆した 29 本の報文が掲載され、そのうちのおよそ 20 報の中で官民学の部門間もしくは部門内での連携、あるいは受益者との協働が、これまでの成果要因やこれからの課題として触れられていた。このことは、多くの部門において、様々な連携の重要性が認識されていると同時に、現時点ではそれが不十分という認識が持たれているようにも読み取られる。いずれにせよ、様々な規模での連携が重要なことには違いない。

「連携」とは、突き詰めれば、人と人との協力関係である³⁾。これがスムーズに上手く進むかどうかは、関係者間における相互の信頼性に大きく依存することは言うまでもない。しかし、社会人になってしまうと、仕事上でたまにしか顔を合わさない人間同士で即座に信頼関係を築くことは困難である。また、実感を込めて言えば、歳を重ねるほど、同一組織内の人との間であってもそれが難しくなる。

しかし、学生のうちであれば、そのハードルはかなり低く、たわいもない話をしながら時間を共有するだけでも、ネットワークとしての絆をある程度深めることができる。さらに、一度結ばれた絆は、年数が経っても完全に断絶してしまうことの方が少ない。つまり、人的ネットワークを築きやすい時期に築いておき、それを将来必要となる「連携」に繋げていければ理想的である。

4.見出しにくくなりつつある参加への意義 筆者らが学生だった頃、まだインターネットが普及し始めたばかりで、学生が個人的に自由に利用できるような状況にはなく、また、通信手段についてもまだ電話と FAX が基本で、Eメールについては数大学の代表学生に試験運用的にアドレスが付与された程度で一度も利用したことのない学生がほとんどだった。そのため、自分の大学以外の情報は教員からの噂ぐらいしか入手のしようが無く、そもそも基本的にあらゆる分野における情報に飢えていた。したがって、全国から集まってくる学生の集いへの参加には、情報収集手段としても大いに魅力があった。

しかし今は、国内はおろか、海外の人とも気軽にコミュニケーションを取ることができ、さらに、処理しきれないほどたくさんの情報が意図せずとも入り込んでくる時代であり、今の学生にとっては、情報を得る手段よりもむしろ確実に必要な情報以外は積極的に取りに行かないようにする手段の方が優位ともいえる。こう考えると、今の若手にとって、あえて NN 学会の若手の集いに参加することの意義を自発的に見出すことは難しいかもしれない。

5.おわりに NN 分野に限らず、多くの社会において、色々なレベルでの「連携」の善し悪しが成功の鍵を握るといえる。スムーズで効果的な「連携」において、良質な人的ネットワークは大いに役立つ。しかし、こうしたネットワークは必要な時に築き始めても手遅れである。こうして考えると、若手の集いに参加することの意義は、案外大きいといえるのではないだろうか。

引用 1)中桐;学生自主企画サマーセミナーの発端,平成20年 NN 学会大会講演会要旨集 130-131(2008).

2)中桐;学生自主企画サマーセミナーの歴史,平成27年度 NN 学会大会講演会要旨集 54-55(2015).

3)中桐;農業農村工学の魅力と若手の人的ネットワークの構築,水土の知 85(5), 435-438(2017).